

見られる。一方之を其の質の上から考へると、羅振玉氏は余に告げて、其の銅質、形式の上などより見て、開元時代（713—741）のものなること全く疑を容れぬというた。此の如く此の貨幣の時代が八世紀、殊にその前半のものなる事が定め得られたとすれば、其の上に刻した所謂回鶻文字も、回鶻が高昌に據るに至つた九世紀の後半時代より以前、既に高昌と接した突騎施には通用の文字として行はれたものであることを明白に認め得る。

従來回鶻文字といふものの傳統については、之をネストル教徒の用ひたシリヤ文字と見るのが普通で、此の事は既に一二四五五年に羅馬法王の使命を奉じて蒙古に使したカルピニ（Pian de Carpine）の旅行記の中にも、一七三一年にはボアイエー（Boyer）氏が早くもそのシリヤ文字との字形の類似を論述したが、クラプロート（Klaproth）氏に至つて更に強く<sup>(27)</sup>主張せられ、「中世紀に於て蒙古地方を訪うた基督教僧侶及びマルコ・ポーロ（Marco Polo）等の記する所に據ると、此の地方特に回鶻人の中に、ネストル派の基督教の行はれたことが解る。思ふに之を傳へたのはシリヤの僧侶であらう。此の僧侶等によつてシリヤ文字も傳へられ、而して之より更に回鶻文字が發達したものであることは明かである」というて、其の次に回鶻字とエストラシゲロ字、シリヤ字、ネストル教徒の用ひたシリヤ字體等との比較對照の表を掲げた。<sup>(28)</sup>これより、此の文字の系統を論ずるものは多くは此の説に従つたのであつたが、更に前に述べたオルホン河畔の第三碑が歐人に知られ、シュレーゲル氏は一八九六年に其の碑の漢文を解釋し、其の中に牟羽に相當する可汗の時、初めて回鶻に傳へられたと記されてある宗教を、ネストル派の基督教と考へ、而して碑の一面の文字を當時ラドロフ、トムセンの諸氏が回鶻文字と見て居たので、此の碑文は回鶻文字がシリヤ文字に發し、ネストル教徒が作製したものであるといふ從來から行はれた説を益々確實ならしめ、且つ其の上